

## 中国漢字の変遷

馮 富榮

### はじめに

漢字が誕生して以来、すでに何千年の歴史をもつようになった。漢字は、中国人の考えや、出来事を記録するもののみでなく、中国の文化を記録するものでもある。また漢字そのものの自体が中国文化の重要な部分を成している。漢字の誕生は、中国文化の誕生と発展に大きな役割を果たす一方、中国文化の発展はまた漢字により豊かな内容を添えてきたということである。ゆえに、漢字は中国の文化と切っても切れない関係にあると言えることができる。

中国では、最初の漢字が倉頡（中国伝説の中の人物であり、<sup>1</sup>4つの目をもっているので鋭い観察力の持ち主として描かれている）によって作られたという伝説が伝わっている。この伝説によると、倉頡は空に並んでいた星の様子や地面に残っていた鳥や獣の足跡から象形文字を作るためのヒントが得られたという。これはもちろん伝説に過ぎず、その信憑性に疑問視すべきところがおおく存在している。なぜならば莫大な数の漢字は倉頡の一人によって創造されたことはとても考えにくいからである。しかし、これだけ後世に漢字の創造者として言い伝えられるようになったのは、倉頡がやはり漢字の歴史において大きく貢献をした人だからであろう。中国のもっとも原始的な図形文字は占いに使うために作られたと言われているが、そのことから、倉頡はおそらく占い師をしていた可能性が高いと想像できる。しかもきっと素晴らしい占い師だったのであろう。つまり、原始の記事図画と記事符号を研究し、新しい記事符号を作る面においてきっと今までの人と違って多大な貢献を成したのであろう。ゆえに、大きな影響力を持つようになり、後世に言い伝えられるようになったのだと思われる。

漢字は、もともと図画から発展してきたものである。たとえば、4000年以上も前の人が使われた「大汶口陶器」（中国の山東省の莒県で発掘された陶器）から文字に似ている図画が発見された。専門家によると図1は、「旦」という字だと言う。図1を見ると分かるように、まるで太陽が高い山を越えて雲を突き破って上昇しようとしていて、人々に朝の

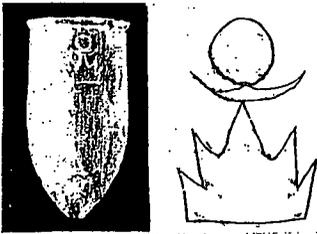


図1

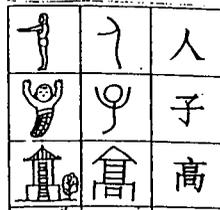


図2

到来を告げようとしているようである。また図2からも分かるように、漢字の「人」、「子」と「高」も絵から来たものである。このような文字例は多数あるが、紙面の関係でここでは省略することにする。

ところで、漢字はどのようにして5000年も前の図画から現代の文字に変化してきたのであろう。そしてどのような道を経て今日の漢字に発展してきたのであろう。以下は、漢字の字形を中心にして漢字の歴史、漢字の変遷を概観してみよう。

## 漢字の歴史

漢字の字形は、大体2つの段階を経て変化してきた。ひとつは「古代文字」と呼ばれ、いまひとつは「近代文字」と呼ばれている。「古代文字」には「甲骨文」・「金文」・「籀文」と「篆文」があり、「近代文字」には「隸書」・「草書」・「楷書」と「行書」がある。漢字歴史のこのふたつの段階の過渡期は、中国の「秦」の末と「漢」の初期になる。

### 1. 「古代文字」の段階

#### 1.1 「甲骨文」

「甲骨文」は、亀甲や動物の骨の上に刻まれていた文字で、図形に近い形をしている。現在発掘されている16万枚の甲骨の上から4600個以上の異なった文字が判明されている。「甲骨文」は「商」の末と「周」の初期に使われたものと見られているので、3000年以上の歴史をもっている。「甲骨文」の発見に関しては次のような話が言い伝えられている。それによると、「清」の末、中国の河南省の安陽小屯村（地名）の農民たちが畑を耕したときに、土の中から動物の骨をたくさん発見した。彼らは、これらの骨が「龍骨」と言われていた漢方薬だと思い込んでしまったので、それを見つけては漢方薬の店に売っていた。その後の1899年に、清朝の国子監（当時の大学）の学長をしていた王懿榮が病気の治療のために漢方薬を飲んでいて、ある偶然の機会に、彼はその漢方薬の中から何切れかの骨があったのに気づいた。よく注意してみると、その骨の上に符号が刻まれていた。王懿榮は有名な学者であったうえ、書道にも精通していた。彼は、これらの骨は決して「龍骨」という漢方薬ではなく、たいへん貴重なものだと感じた。そこで漢方薬の店からそのような骨を全部買い取って研究しはじめた。その結果、骨の上に刻まれていた符合はすべて古代の文字だと断定し、その文字を「亀版文字」と名付けた。「甲骨文」はこのようにして発見されたという話であった。

現在出土されている「甲骨文」の大多数は、中国の「商」の末に使われたものと見られている。当時はまだ奴隷社会であり、科学文化はまだ未開化のままであった。その時の人々は、さまざまな自然現象や社会現象に現われていた変化の原因について理解できなかったため、すべては神様や鬼によって操られていると信じていた。彼らが神様や鬼、そして祖先の魂が人々の運命を決定することができるだけでなく、未来についても予言できると思っ込んでいた。ゆえに、占いは当時非常に流行っており、人々は占いの結果を完全に信じ

ていた。その時の権力者たちも、遠征に行く前や収穫を祈るとき、または病気をしたときなどに、すべて占いをを行い、その占いの結果を丹念に記録していた。当時の占い方法は、甲骨に穴などを削って火で焼き、その火の熱によって甲骨に亀裂が入って来るので、その亀裂を物事の兆しと見なすというやり方である。つまり、占い師はその亀裂の形に基づいて吉か凶かを占っていたのである。そして占いの事由や占い師の名前及び占いの結果などを記録しておいたのが現在の「甲骨文」である。ゆえに「甲骨文」は中国語ではまた「卜辞」とも呼ばれる。中国語の「卜」は“占い”の意味で、「辞」は“言葉”の意味であるので、「卜辞」は“占いの言葉”という意味である。

「甲骨文」の発見は中国文化の研究史上において非常に大きな役割を果たしている。それは「甲骨文」の発見によって中国古代の占い状況が明らかにされたということよりは、むしろ「甲骨文」の研究から「商」の政治や経済及び軍事などを理解するのにおおくの示唆が得られたということに原因があるからである。たとえば、「甲骨文」の有名な研究者として知られている郭沫若が中国の「商」の社会は奴隷の社会だと結論づけた根拠は、まさに「甲骨文」の研究から得られたものである。たとえば、彼は、「卜辞」の中の「衆」という文字が日の下に3人が立っているという形(𠄎)を取ったのは、そのときの大衆は田んぼの中で集団作業に従事する奴隷だと意味しているからだと説明した。また「追いかける」という意味の中国語は現在「追逐」と表現するが、その「追」と「逐」の違いがどこにあるかに至っては今までは誰も説明できなかった。しかし、楊樹達が「甲骨文」を研究した結果、「追」は人を追いかけるときに使われたものであり、「逐」は動物を追いかけるときに使われたものだという結論を出すことに成功した。このように、「甲骨文」は中国历史文化の研究にすばらしい役割を果たしてくれた。

## 1.2 「金文」

「金文」は、銅器の上に刻まれていた銘文であり、「商」の末から「戦国時代」まで約1200年以上にわたって使われていた。考古学の研究によると、中国は「夏」の時代からすでに「青銅器時代」に入り、「商」の後期と「周」の時代になると銅や銅器の製造が非常に発達していた。「周」より前に、銅のことが金とも呼ばれていたので、銅器の上の銘文は「金文」と呼ばれるようになった。現在、識別できた「金文」は2420個で、まだ識別できていない「金文」は1352個あるという。

「商」の時代の銅器にあった「金文」の文字数がきわめて少なく、大体1文字か2文字であった。それはほとんど「族徴」であり、それは一族のシンボルを表すものであった。ゆえに、このような「金文」は「族名金文」や「記名金文」と呼ばれている。「西周」になると、青銅器の使用範囲が広がり、種類も多くなった。それにつれて、青銅器の銘文も簡単な記名から記事に発展し、文字数も数文字から数百文字に増加してきた。たとえば有名な「大盂鼎」には291個の文字があり、さらに「毛公鼎」には497個の文字があった。記事の内容も非常に豊富になり、祭礼のみでなく、奨励や戦争、訓示なども含まれていた。中には、祖先や王侯たちの功績を称えたものや重大な歴史事件を記録したものがとくに多か

った。

「金文」は、考古学の研究にとっては貴重な材料である。たとえば、せつかく発掘された古墳の年代が確定できない場合は、もし出土された物品の中に年代の記録のある青銅器がひとつでもあればこの問題がすぐ解決できる。また青銅器の銘文は、後の人によって勝手に書き直される恐れも少ないので、「史記」などの歴史古書と比べ、はるかに貴重な歴史研究の材料となる。なぜならば、「史記」などの古書はどれだけの人によって写されたものかわからないので、写すときのミスや写す人の都合によって書き直されてしまった可能性が高いからである。すなわち歴史古書よりは「金文」の信憑性が高いということである。ゆえに、「金文」に記載された歴史事件や社会生活の内容を根拠にして歴史古書の誤りを訂正したり、空白を埋めたりすることもできる。たとえば、長い間、「周」の時代は封建社会だという見解が学者の間で一般的に支持されていたが、郭沫若は、「周」の多くの銅器の銘文から奴隷売買の大量の証拠を見つけた。よって、彼は馬や品物と同じように奴隷を人に贈与したり、売買したりすることができただけでなく、奴隷を世襲することもできたのだから、そうされた人々は当時決して自由民ではなく、自由のない奴隷だったのであると指摘した。ゆえに「周」は封建社会ではなく、まさに奴隷社会であったと結論づけられた。

「甲骨文」と比べ、「金文」は使用時間が長く、約1200年以上に達しているので、「西周」、「春秋時代」と「戦国時代」の文字を研究する主要な材料となるうえ、また漢字の早期の形体変化を研究するにあたっての貴重な根拠となろう。後期の「金文」からは美術化の傾向が見られた。つまり文字の大きさが均一化してきており、字形もかなり美しくなった。(図3を参照)。

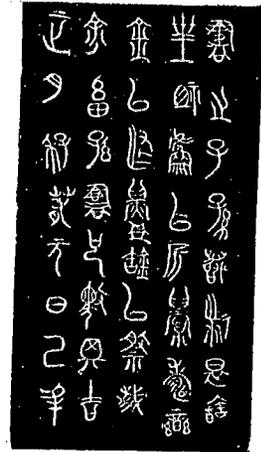


図3

### 3 「大篆」(籀文)と「小篆」(篆文)

「大篆」は、「籀文」とも呼ばれ、「小篆」は「篆文」とも呼ばれるが、普通「大篆」と「小篆」を一括して「篆文」と呼ぶ習慣がある。「大篆」には「籀文」・「石鼓文」・「詛楚文」が含まれている。《説文解字》の中から「籀文」が200個以上見られた。字の構造が複雑であり、同じ旁が往々にして重複して出現するのが「籀文」の特徴である。たとえば、雷は「𩇛」と書かれ、副は「𩇛」と書かれていた。「石鼓文」は、太鼓の形をしている石に刻まれていた銘文であるので、「石鼓文」と名づけられた。中国の陝西省の鳳翔県に発見されたものであるが、現在北京の故宮に保存されている。専門家によると、これらの「石鼓文」は「春秋時代」の末から「戦国時代」の初期までのものであり、内容は「秦」の始皇帝の生活を描いたものや、「秦」の始皇帝の功績を称えたものであった。一方、「詛楚文」は「北宋」のときに発見された3枚の石に刻まれた銘文であり、内容は「秦」の始皇帝が「楚」の王を批判するものであったので、「詛楚文」と名づけられた。「詛楚文」の具体的な年代に関

しては一致した見解がまだ得られていないが、大体は「戦国時代」後期の「秦」の文字ではなかったかと見られている。「石鼓文」と「詛楚文」に関しては図4と図5を参照する。



図4 「石鼓文」



図5 「詛楚文」

「小篆」は、「大篆」を基にして作られた文字であるので、「大篆」と「小篆」の間にはっきりした時代差が見られない。「大篆」は書き方が極めて複雑であったため、書くのにたいへん時間のかかるものであった。しかしこれは統一されたばかりの広大な「秦」の国にとってはたいへん都合のわるいことであった。なぜなら「秦」の始皇帝が一連の政治改革を行ったため、全国の広い範囲での書類の伝達が頻繁に行われなければならなかったからである。ゆえに、より簡略化され、より書きやすい文字が社会から切実に要求されるようになった。こうした社会の要求に応ずるために、李斯らが当時流行し出した「小篆」を整理し、それを標準文字として広く使用するように全国に推し進めたのである。「大篆」から「小篆」への変化は、単なる文字の書き方の簡略化を意味するものではなく、中国の文化史上の一大進歩を意味するものである。とくにいろいろな書き方をしていた中国の文字を統一したという面から見ればたいへん重要な歴史的な意味をもっている。なぜならば、漢字の歴史においては、「小篆」は中国の「古代文字」段階の最後となる字形であるので、「古代文字」から「近代文字」への橋渡りの役割を果たしたからである。「近代文字」と「古代文字」は、形において大きな違いを見せているので、「小篆」なしでは「近代文字」と「古代文字」を関連付けることがたいへん難しいのである。つまり「古代文字」の解読にとっては「小篆」が重要な存在となる。

「甲骨文」、「金文」及び「大篆」と比べ、「小篆」には以下の特徴がある。

- 1) 画数が多いか少ないかにかかわらず、文字全体が長方形の形に整っている。しかも、縦線はすべて上から下へと伸びていて、「上疎下密」という感覚をもたらしてくれる。
- 2) 図形から本格的な線形化された文字へと変化した。つまり「甲骨文」や「金文」に見られた丸や塊などがなくなり、太さがほぼ均一化された線で書かれた文字に変わった。
- 3) 線は基本的に丸めをもっており、とくに曲がる場所は特徴であった。ゆえに、非常に美しく見える。

「小篆」は、中国の統一した標準文字として歴史の舞台に登場したが、しかし全国的に使用された時間はそれほど長くなかった。まもなく、「隶書」が「小篆」に取って代わって使われるようになった。

## 2. 「近代文字」の段階

### 1. 1 「隶書」

「隶書」は、「大篆」の書き方を簡略化したことから由来した文字だと言われている。「大篆」は曲がるように書かなければならない画数が多いので、非常に書きにくい文字である。よって非公式の場合は、人々は書きやすいようにして、本来曲がらなければならなかったところをまっすぐに書いたりしていたが、それが後に「隶書」という字体に発展した。「隶書」は「秦」の時代に始まったと一般的に見られていたが、しかし「秦」より前に隶書がすでに存在していたことを指摘された学者もいた。たとえば裘錫圭(1988)によると、「秦」の「権量銘文」から「隶書」が「小篆」に滲入していたことが分かった。「権量銘文」とは、計量の単位を統一するための詔書であったので、正式な「小篆」で書かなければならなかった。しかし現存の「権量銘文」の中から「隶書」の要素が入っていた詔書がかなり見られたという。このようにして、「秦」の時代より前にあった「隶書」が「小篆」に滲入してしまった結果、「隶書」の要素が入っていた計量単位の統一に関する詔書ができたのであって、その詔書が「隶書」を生み出したのではないことが分かった。したがって、「大篆」から「小篆」へ、そして「小篆」から「隶書」へと変化してきたというよりは、むしろ「大篆」から同時に「小篆」と「隶書」が生まれたといったほうが適切であろう。

「隶書」が誕生した原因は、おそらく「快速書写」という社会の需要にあったのであろう。とくに「秦」の始皇帝が中国を統一したあと、書類の伝達などが頻繁に行われるようになったので、「小篆」が公式の文字としての地位が確立されていたにもかかわらず、より書きやすい「隶書」のほうが民間でより頻繁に使われるようになったのであろう。「西漢」の初期になると、「隶書」の使用範囲は広がり、徐々に「小篆」にとって変わって使われるようになった。「隶書」、大体3つの段階を経て発展してきた。まずひとつ目として挙げられるのは「秦隶」と呼ばれるもので、「西漢」の中期より以前に使われたものである。このときの「隶書」にはまだ細長いというイメージがあり、「篆文」の影響がまだ残っていた。ふたつ目は「西漢」の中期以降に使われたもので、普通「漢隶」と呼ばれている。このときの「漢隶」は「篆文」の細長いというイメージから完全に離脱し、幅が広く縦が短いという「隶書」の典型的な特徴を完全に樹立したものである。そして3つ目は「東漢」の中・後期に使われたもので、「八分」や「分隶」と呼ばれている。この「分隶」は八がもっている“左はね、右はらい”という特徴をもっているところから名づけられた。

「隶書」の出現は中国の漢字史上の偉大な革命である。なぜならば、「隶書」の後に現れてきた「草書」、「行書」、「楷書」はすべて「隶書」に源をもっているからである。ゆえに裘錫圭が《文字学概要》の中で「隶書」・「草書」・「行書」と「楷書」を一括して「隶楷段

階の漢字」と呼んでいる。また潘伯鷹（1962）が《中国書法簡論》の中で、“中国の漢字と書道の発展について言えば、「隶書」は一大変化をなした。ゆえに、今日ないし将来のしばらくの間はすべて「隶書」の時代だと言っても過言ではない”と指摘している。なぜなら、「楷書」が分かる人は必ず「隶書」が分かるが、「篆文」が分かるとは限らなく、「篆文」を識別するのに別の知識が必要だからである。したがって、「隶書」がまさに現代漢字の鼻祖である。

## 2.2 「草書」

「草書」は、漢字の四角いという観念を破って「隶書」を極力簡略化した結果、作り出した字体である。「草書」はおよそ「西漢」より流行し出したが、「東漢」になると幅広く使われるようになった。「草書」の「草」は、正式の「正」と反対の意味であるので、文章を書くときの下書きは中国語で「草稿」と言う。「草書」は「隶書」の書き方からおおきく離脱し、続けて書く筆画が非常に多いものである。つまりひとつの文字の筆画を中断させないように最初から最後まで続けて1画で書いてしまう。ゆえに字の輪郭をできるだけ出すように工夫されていたが、中の具体的な筆画は省略されてしまった。例えば、「南」を「𠂔」と書いたり、「林」を「𣏟」と書いたりしていた。またごく簡単な筆画をもってある字の一部分として使われた。例えば「𠂔」をもって「堯」の上部の3つの土を意味していた。

早期の「草書」には、「隶書」の痕跡がまだ残っており、この時期「草書」は普通「章草」と呼ばれる。「章草」と呼ばれたのは、ふたつの理由があると言われている。ひとつは漢章帝がこの字体が非常に気に入っているだけでなく、この字体を書くのが非常にうまいということであり、いまひとつは長期にわたって書道家に愛されていた《急就章》の名前から由来したものだという。「三国時代」の呉国の皇象が写した《急就章》が非常に有名であった。その後の書道家たちは競ってその写す練習をしていた。このようにして《急就章》の模写は、「章草」の民間への広がり大きな役割を果たした。

「章草」のほか、「今草」もあるが、それは「南北時代」から「隋唐時代」にかけて形成されたものと言われている。「今草」がひろく使われていた初期、まだ書き方が規範化されておらず、かなり雑多な書き方が世に流れていた。ゆえにどの書き方が正統であるか、どの書き方が正統でないかの判断はきわめて困難であった。当時、「草書」は仏教の経典の注釈によく使われていた。仏教をひろく世に伝えるために、僧侶の智永が人々によく知られていた《千字文》を「楷書」と「草書」の対照のやり方で800冊写し、それを多くの寺に配った。よって「今草」の書き方の統一を試みた。その結果、智永の書いた「楷書」と「草書」の対照を成していた《千字文》は、「草書」の書き方の規範化を樹立したものとなった。今の日本語の仮名も「今草」を基にして作られたようである。

## 2.3 「楷書」

「楷書」は、「隶書」から変化してきたものである。基本的には「隶書」という字体の構造を保っている。「楷書」は「東漢」に出現したものであり、「魏晉」の時代から成熟期に入った。「楷書」の「楷」は、中国語で模範の意味であるので、「楷書」は標準字とい

う意味である。「六朝」以来、「楷書」はまた「正書」や「真書」とも呼ばれるようになった。「正」はまっすぐの意味であることから、「篆書」などと違って横の線も縦の線もまっすぐに書くのが「正書」の特徴である。「兩晋南北朝」の時代では、「楷書」が繁栄時期に入り、王羲之の作品は当時の代表だと言える。「隋・唐」の時代になって、「楷書」は最高の時代に入った。「科挙試験」に参加しようとする人は、「楷書」に長じないといけないほどであった。そのとき、著書はもちろん、詩歌の写しも、仏教の經典の写しなどもすべて「楷書」が主であった。ゆえに、「楷書」の実用的な価値はこの時期に最高に実現された。

「楷書」は、「隶書」より書きやすく、「草書」より読みやすいことから、「魏晋時代」から「隶書」に取って変わって通用する字体として使われるようになり、現在に至った。「宋」になってから印刷術の発達によって、印刷専用の字体——「宋体」が現れてきた。それは「楷書」を基にして作られたものである。また現代にも使われている「仿宋体」や「黒体」などもすべて「楷書」から来たものである。「仿宋体」とは筆画が「宋体」より細い字体であり、「黒体」とは「宋体」より筆画の太い字体である。

#### 2.4 「行書」

早期の「行書」は、「草書」と「隶書」中間的な文字であり、現在使われている「行書」は「草書」と「楷書」の中間的な字体である。「行書」は、「隶書」や「楷書」より書きやすく、「草書」より読みやすいという特徴をもっているので、現在に至っても人々にひろく愛用されている。「東漢」の後期から行書が見られるようになった。「行書」には決まった書き方が設定されていない。行書の歴史を振り返ってみても役人の中でも民間の書道家の間でもその書き方を整理し、規範化したことは今までになかった。「草書」や「隶書」、「楷書」などには、それぞれの規範化された書き方があるので、その字体を書こうとすればその字体の決まった書き方に従わないといけない。しかし「行書」はそれらと違って、自由自在に書くことができる。ゆえに、書道家たちの芸術理念を最大に具現化し、書道家たちの創造力を最大に表現することのできるものが「行書」だと言える。したがって、書道家によってはまったく違った風格の「行書」が生まれてくる可能性がある。これもまた「行書」の永遠な青春力をもつことのできる理由でもある。

「行書」には、また図6の「行楷」と図7「行草」の違いがあるが、前者は「楷書」の要素が多いが「草書」の要素が少ないのに対し、後者はその逆である。「行書」の書道家と

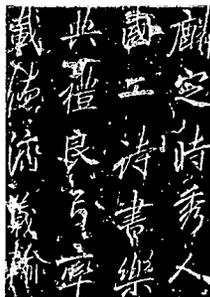


図6 唐の李邕の《李思訓碑》

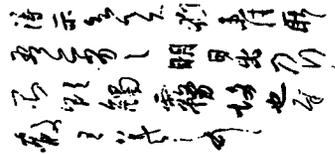


図7 王羲之の《得示帖》

して最高の名誉をもらったのは、やはり「東晋」の王羲之と王献之であろう。このふたりのことを「2王」と呼ばれているが、この「2王」は、梁武帝からも唐太宗からも非常に高く評価されていた。話によると、「行書」の最高の作品だと言われている王羲之の《蘭亭序帖》の原本は、唐太宗によって大事に保存されていたが、唐太宗の亡くなったときに副葬品として一緒に埋められたという。

「行書」は、「草書」の動態と「楷書」の静態を重ねてもっている上、「草書」のように書き方に関する規約がないので書く人の思うままに自由自在に筆を運ぶことができることから、唐太宗や武則天を代表とする上流階級のみでなく、庶民からもかなり長期にわたって親しまれてきた。その人気ぶりは現在に至っても衰えていないと言えよう。

### 結び

以上、中国の漢字の辿ってきた歴史について概観してきた。何千年の間、漢字は、図形文字の形から現在の四角い漢字という形に変わり、また神秘的なものとして崇拜されていた栄光を極めた時代から、中国の経済などの面での立ち遅れの原因が漢字の書きにくさや学習しにくさにあると罵声を浴びた時代へと、波乱万丈の歴史を経験してきた。最近はまだ漢字は中国文化の偉大部分として再評価されてきた。しかしついここ数年、コンピュータの時代が到来したとき、漢字は再び疑問視されはじめた。コンピュータ処理を中心とする情報化の時代では漢字のなすべきはないだろうとさえ予言されていた。まさに漢字の末日を宣告しているようであった。しかし、漢字は見事にその予言、その宣告を打ち破って、力強く残ってきた。コンピュータによる漢字の処理はすばらしい成果が上がった。古代文明を成していた悠久たる歴史をもつ漢字は見事に自分の新しい生命力を全世界に誇示した。今日漢字に関する研究、とくに漢字に内包されている中国文化の研究は雨後の竹の子のように多くなってきており、これからもきっとますます多くなるのであろう。

### 参考文献

- 常 敬宇 1995 漢語詞彙与文化 北京大学出版社  
韓 鑑堂 1994 中国文化 国際文化出版公司  
何 九盈・胡 双宝・張 猛ら 1995 中国漢字文化大観 北京大学出版社  
金 開誠・王 岳川 1995 中国文化大観系列3 中国書法文化代観 北京大学出版社  
潘 伯鷹 1962 中国書法簡論 上海人民美術出版社  
裘 錫圭 1988 文字学概要 商務印書館